

人間の産物である」と言明されている。ただ美的仮象の発展と深い関連をもつ趣味は、主体と他者、個人と共同体をつなぐものであり、第二十七書簡の結末では、趣味を基盤とした共同体論が展開される。ここでは「共通感覚」という言葉が出現する。遊戯衝動と美的仮象の解明には、趣味と共通感覚との関連の考察が更に必要であると思われる。

ジェイムズにおける信じる意志の射程

林 研

ウィリアム・ジェイムズの『信じる意志』(以下、『意志』)で主張されるテーゼは、「知的根拠に基づいて決められない真の選択は、情的本性に基づいて選択されることが正当である」というものであり、直接的には宗教的信仰の擁護である。この説はしばしば、「信じたいものを何でも信じていいのか」という批判にさらされてきた。こうした批判への応答として、この説の適用範囲を限定する方法がある。例えばL・シュレヒトは、ジェイムズが記述している信仰は宇宙との関係のヴィジョンであり、伝統的有神論を指すのではないとする。そしてジェイムズが示唆する条件、A、「真の選択」に直面していること、B、知的見地に基づいて決定できないこと、C、仮説の真理性が、少なくとも部分的には行為主体に依存していること、を遵守することで、この説の有効性が保証されるという。

こうした限定は『意志』の読み方としては正当である。だが、『宗教的経験の諸相』(以下、『諸相』)で多様な個人的信仰が記述され、好意的に評価されていることを考えれば、対象の

限定が妥当かどうかは疑わしい。そこで、これら諸条件を外すことを試みたい。

Aで言う「真の選択」は論理的な理想状況であって、現実には「程度」を許容するのではないかと思われる。ジェイムズはしばしば二分法(「一度生まれ／二度生まれ」、「親密／疎遠」など)を提示するが、これは対立項というより分析のための両極であり、最終的には程度の問題として調停されることが多い。

また、F・C・S・シラーはプラグマティズムの立場から、ジェイムズの言う「信念」が「微かな願いから確信までの、心理学的性質の全音域」を示し、「成長したり衰えたりする」ものだとしている。このように、「信じる」ことが程度の差を含むなら、この条件の厳守は現実的ではない。

Bの条件は、本来「信じる意志」を裏打ちするプラグマティズムによって保証されている。『プラグマティズム』では、「観念は、私たちが私たちの経験の他の部分と満足な関係に入る助けになつてくれる限りにおいて真となる」とされており、これは「信じる意志」が認める宗教的信仰についても適用される。

つまり、経験の他の部分との間に矛盾を生むならば、その信念は問い直されなければならないのである。これが前提されている以上、特別この条件を持ち出す必要はないことになる。

Cの条件は「信じる意志」の説得力に大きく寄与しているのだが、これが伝統的有神論のような、独立した宗教的真理を信じる立場を除外してしまうとすれば疑問が生じる。『意志』で記述されているのは確かにジェイムズ流の宗教観だが、『諸相』では様々に展開される個別の宗教が、最終的には「過剰信念

「over-belief」という概念をもって許容される。「過剰信念」とは、宗教の共通項を越えた、各個人が持つ特定の信仰を意味し、それは生きた信仰のためには不可欠だという。つまり実際の宗教生活では、信仰の対象はそれぞれ具体的な姿を取るべきであり、ここには伝統的有神論も含まれるはずである。

過剰信念を許容するためには、先述のように信念を変化するものと捉えることが必要である。ジェイムズは、宗教的仮説を信じて生活していくことが検証であり、その結果その仮説はより確かなものになっていくと考えた。科学理論が様々な修正を受け、変容しつつも維持されていくように、宗教的仮説も、プラグマティックな検証を受けつつ肝心な「過剰性」を維持することは不可能ではないだろう。

信念が可塑的なものであり、絶えざる検証の中にあるというプラグマティズムの世界観を前提とするならば、「信じたいものを何でも」信じるのではないことを担保しつつ、信じる意志のテーゼをあらゆる宗教の場面に適用することも可能と思われるのである。

ヤスパースの「未来における信仰」について

藤田 俊輔

ヤスパースは、前期の『現代の精神的状況』(一九三一年)を嚆矢として、後期の『歴史の根源と目標』(一九四九年)および『原子爆弾と人間の未来』(一九五八年)において現代論を展開している。こうした現代論において未来の問題が扱われる際には「覚醒的予断(erweckende Prognose)」という立場

がとられるが、これは我々の可能性を開くことにより諸々の計画や行為の出発点を与え、我々を最も広い地平へと連れ出すことにより我々の自由を高める予断である。換言すれば、覚醒的予断とは「我々の現在の意識」を高めるものに他ならない。

ヤスパースによれば、我々がどのように信じ、また何を信じるといふ問いこそが未来に対する本来的な問いであり、その他のあらゆる諸問題を制約し包み込んでいく問いである。つまり、未来の諸問題は信仰によって担われるのでなければならぬ。ここに、現在の信仰を導く「未来における信仰」の問題が生じてくる。無論、この考察の立場はヤスパースの「哲学的信仰(der philosophische Glaube)」によるものではあるが、しかし「未来における信仰」の問題自体は宗教的信仰においても共有されるべきものとして考えられている点が重要である。そこで本発表は、この問題が最も明瞭な形で提起されている『歴史の根源と目標』を主な参照軸とすることにより、「未来における信仰」というヴィジョンの輪郭を示すことを試みたい。

考察の手順としては、まず「未来における信仰」が問題となってくる背景を確定すべく、「枢軸時代(Achsenzeit)」を中心とした「世界史の図式(Schema der Weltgeschichte)」を確認し、その図式が現在と未来に対して持つ意義を提示する。

この図式の展開によって、ヤスパースは現代の危機を人類に普遍的なものとして意識させ、その危機を好機へと転換させようとする。ヤスパースは現代的危機の根本に信仰喪失を見ており、そこからの転換を図るべく「未来における信仰」の在り方を提起し、第二の枢軸時代に向けて現代人の意識を変革させよ